と人体の陽が盛んなものですが，天の陽が盛んになると，ますます人体の陽も盛んになって，ワッと熱が出ます。乾姜附子湯証は，基本的に陽気が伏していますが，天陽が盛んになるとき，人体の陽も同じように少し盛んになる。まさに氷が溶けるように伏陽が一時的にとけてきます。ほとんど陽気が動いていない状態が解けて，陽気が胃から胸へフワッと昇り，胸の陽が相対的に過剰になって，煩躁となります。だから昼だけ煩躁します。

太陽が沈むころになると伏陽にもどり，夜は静かです。これは陽気が伏している状態ですから，いいことではありません。そこで乾姜と附子の辛熱で陽気を鼓舞してやります。四逆湯の亡陽では，甘草を入れて陽気を守り，乾姜附子湯の伏陽では，甘草を抜いて陽気を振るいたたせます。両処方は全体としてはともに陽虚であり，乾姜と附子は必要なのですが，陽気の状態がちがっているのす。

補足になりますが，乾姜附子湯の条文は第61条だけです。この条文は伏陽証としてはむしろ少し特殊なものです。もう少し伏陽状態が強くなると，１日中伏陽状態となって，当然「昼日煩躁」はなく，「脈沈微，厥冷，無大熱」で「下痢」もあるでしょう。したがって乾姜附子湯の典型的な証は，第61条の条文とは異なるはずです。昼日の煩躁はなく，伏陽状態を全面的に示しているものでなければなりません。白通湯が参考になります。

白通湯・白通加猪胆汁湯

葱白四莖，乾姜一両，附子生一枚。

白通湯は，乾姜附子湯に葱白（ネギ）を加えたものです。

また，白通加猪胆汁湯は白通湯プラス猪胆汁・人尿です。

第314条「少陰病，下利，白通湯主之」。

第315条「少陰病，下利，脈微者，与白通湯」。

第315条「利不止，厥逆無脈，乾嘔，煩者，白通加猪胆汁湯主之」。

白通湯では，単なる下痢と脈微のみの症状ですが，猪胆汁を加えるような状態になると，下痢が止まず，さらに厥逆がひどくなり，無脈，つまり脈が絶えんと欲すよりもっとひどい，ほとんど触れないぐらいです。脈微欲絶ならば，なんとか触れる脈です。しかもむかついて，胸のあたりがもだえます。

肝邪気，安中，利五臓，益目精，殺百薬毒」。

葱白の作用としては，陽を通じる作用をみればいいと思います。マイルドな桂枝という感じです。陰陽が表と裏で遊離するものを「格陽」といい，陰陽が上と下で遊離するものを「戴陽」といいます。通脈四逆湯の後の加減方に，面赤の者に葱白九莖を加えるというのがありますが，葱白には，戴陽，上に昇った陽気を降ろす作用もあります。これも，桂枝が上衝を治すのと似ています。この他に葱白を使う処方に，金匱の旋覆花湯があります。

白通加猪胆汁湯は「無脈，嘔，煩」。これは基本的に通脈四逆加猪胆汁湯と似ています。つまり，胃の陽気が五臓五腑に通じていないために，胃に仮熱がある「除中」になりかけの状態です。白通加猪胆汁湯は，それがもっと甚しい。除中のまさに一歩手前です。何故ならば脈が，「微欲絶」ではなくて，「無脈」になっているからです。これは胃気が，脈に接合されていないことを意味します。五臓五腑にもやはり，胃気が行っていません。そのために胃に仮熱があって乾嘔を生じ，胃の仮熱が胸へ上って煩となります。これに対して，胃中の仮熱をだますために猪胆汁を加え，熱薬が胃を通過し全身にゆきわたると伏陽を通じさせることができます。

脈が回復するときは，少しずつ回復するのがよいのです。もともと虚している胃気が，少しずつ全身に供給されるのがよいのです。虚している胃気が，一度に全部出てしまったら，後がつづかず死んでしまいます。脈が急に出るのは，亡陽であって，陽気が外へ逃げてしまえば死にます。桂枝で，一度に胃気を通じさせずに，葱白でマイルドに通じさせます。白通加猪胆汁湯証は，胃気の暴発による危険性，つまりは守胃作用の重要性を示してくれる条文と言えます。